

月井雄二先生のご逝去を悼む

和田, 幹彦 / WADA, Mikihiko

(出版者 / Publisher)

法学志林協会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法学志林 / Review of law and political sciences

(巻 / Volume)

116

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

5

(発行年 / Year)

2019-03-24

月井雄二先生のご逝去を悼む

法学部長 和田 幹彦

法政大学前教授・月井雄二先生は、二〇一八年二月一日、急病によりご逝去されました。享年、六五歳であられました。私は、その訃報を聞いたときに、一五年間、同じ法学部に所属させていただいた若輩の同僚教員としてのみならず、特にわけがあつての月井先生から学恩ゆえに茫然といたしました。今も、最後にもう一言、御礼を直接言葉で申し上げられなかったことを悔いつつ、涙をこらえます。

月井先生は、一九五二年一月二七日にお生まれになりました。その後、一九七一年四月に東北大学、理学部生物学科にご入学なさいました。一九七五年四月には順調に東北大学院理学研究科生物学専攻修士課程にご進学、二年後に理学修士号を取得されるや、そのまま専攻の博士課程に進学なさいました。最速の三年間ですぐに博士課程を修了され、理学博士の学位を取得されました。優秀な「ポスドク」の証である、日本学術振興会・奨励研究員を二年お務めになるなどした後、一九八三年四月、我が法政大学の第一教養部（当時）の「生物学」の専任講師にご就任、二年後には助教授にご昇格なさいました。その後、順調に研究・教育の成果をあげられ、二〇〇三年には教授にご昇任なさっておられます。

この間、そしてその後の月井先生の生物学研究でのご業績には、目を見張るものがあります。月井先生のご研究者としての「足跡」には、大きく分けて四つのフェーズがありました。

最初のフェーズは、東北大学の樋渡研究室で学んだゾウリムシの研究でした。法政大学にご就職された後も、授業や学務の傍ら、毎日何時間もかけてゾウリムシの世話をされておられました。その結果、月井先生ならではの、生物学上の大問題である、「種とは何か」という深遠な疑問に答えるような数々の発見をなさいました。その研究業績「接合型の遺伝解析に基づくゾウリムシの種分化過程に関する研究」は、二〇一四年一月に、日本原生生物学会の「日本原生生物学会賞」を受賞し、高く評価されました。ご本人も、この受賞を大変喜んでおられました。月井先生のような、一見地味で実は深遠な研究が、ご生前に評価されたことは、若輩同僚としての私にとってのみならず、本学・法政大学全体にとっても、本当に喜ばしいことでした。また、前後しますが、振り返れば早くも一九九〇年には、ご制作のハイビジョン映画「High definition video image of protozoa (原生動物のハイビジョン・ビデオイメージ)」が「International Scientific Film Association (国際科学映画協会) 第四〇会大会および学術祭」(オランダ・ユトレヒト市で六月に開催)で Special diploma (特別賞) を受賞され、同年には日本でも、第三一回科学技術映画祭にて科学技術庁長官賞を受賞しておられます。

第二のフェーズでは、コンピュータネットワークを使ったデータベースの構築の分野で、活躍されました。一九九〇年代に月井先生はいち早く原生生物情報サーバーという、微生物の画像データベースを立ち上げました。最先端の研究者として、アリヤクヅラ、アサガオ、ネズミと言った多様なデータベース構築に協力されました。こうした共同研究は多忙ながらエキサイティングな時期であったと存じます。でも、月井先生はそうした中でも、黙々とゾウリムシの培養をお続けになられ、決して「ぶれ」の無い研究者の姿を示しておられました。

二〇〇〇年になると月井先生は、多様な微生物のデータを収集するため全国を行脚なさり、数多くの場所から微生物の採集を始められました。これが、第三のフェーズです。二〇〇一年からの採集記録によれば、二〇一七年までに、

五百回近い採集旅行をなさっておられます。そこで集めた微生物のデータをサーバーに登録し続け、その集大成が、二〇一〇年に出版されたご単著、『淡水微生物図鑑』です。このご高著には、なんと七五〇種類を超える微生物が写真で紹介されています。この膨大な数の写真と記述が、まさに月井先生のご研究の「真骨頂」でありました。この間に蓄積された分類の知識が、後に宇宙船内に住む微生物の調査にも応用されました。

そして、最終フェーズが、残念ながら道半ばで途絶えることになった、「ラップムシの大量培養系の構築」でした。ご逝去前の数年、月井先生はこの「ラップムシ」の研究に没頭されているようでした。あと少して「完成間近」のご研究であった模様です。そのために、毎晩夜遅くまで休むこと無く研究室にいらしておられました。法政大学で、同じく生物学の研究・教育に従事なさっているお若い先生によれば、もしかしたら、この半年間の頑張りが、月井先生のご寿命を縮めてしまったのかもしれないと思い、悲しみに沈む、とおっしゃっておられます。

しかし、月井先生はこうして、好きな生物学の研究に没頭され、実に充実した研究者生活を送っておられたのだと思います。

また、ご所属された諸学会でもご活躍されました。一九九四年から六年間、日本学術会議・遺伝学研究連絡委員、二〇〇一年から六年間は科学技術振興事業団・GBIF技術専門委員会委員、二〇〇九年から三年間は日本原生動物学会の評議員を、それぞれお務めになりました。

月井先生は、研究者・教育者としてのみならず、学内行政にも熱意をもってご貢献なさいました。まだ助教教授であられた一九八五年度、すでに第一教養部の教授会副主任を、その後の教授時代の一九九六年度には同教授会主任の責務を立派にお果たしになられております。

最後に、若干の私事を述べることをお許しください。二〇〇三年度からの、第一教養部の専任教員の他学部への移

籍に際して、月井先生は法学部にこそ所属が変われました。これこそ、私にとっては僥倖でありました。なぜなら、私は二〇〇〇年度から法学部で「法と遺伝学」という専門科目を開講し、文科系の専攻者でありながらも学際分野を法政大学でも立ち上げるべく、遺伝学の最先端を必死で追いかけてながら研究をしておりました。そこへ基礎生物学、中でも遺伝学・染色体動態がご専門の月井先生が、移籍していらしたのです。最初の教授会での自己紹介で、私が「法と遺伝学」という研究・教育を行っているので、是非ご教示を乞いたい、と申し上げると、「法学部で遺伝学を勉強している方がいるとは思わなかった」と驚いておられました。しかし、私が月井先生のご研究室に足を運ばせていただいたのは、それから四、五年も経た後でした。『自分がまずは、遺伝学の基礎をしっかりと学んでからではないと、月井先生のような大家に教えるを乞うことは先生の貴重なお時間の無駄になる』という思いが強かったからです。しかし、これではいつまでたっても「その時」は来ない、と決心し、アポをいただいて月井先生の研究室のドアをノックいたしました。遺伝学の「ひよっこ」であった私の拙い質問に丁寧に答えてくださった月井先生は、「生物学」の授業でお使いになっている、工夫を凝らされた未交刊の教材を、私にも一部お分け下さいました。その「宝物」を手に入れしさがあふれ、ポアソナードタワーの一階ロビーを踊るように駆け抜けた自分の姿を今でも思い出すことができます。二度目にこそ、自分の研究論文を手にも、月井研究室を訪れるのだ、と決意した日でもありました。その日を逃してしまったことを思うと、学恩をお返しできなかった月井先生には、申し訳ない気持ちでいっぱいになります。

月井先生。私もこれから一層、遺伝学を含む生物学と法学の学際研究に打ち込み、いつかご恩を返したいと存じます。

本誌をもって、「伝統ある『法学志林』の「故 月井雄二教授 追悼号」といたします。月井雄二先生のご業績とご活躍を振り返り、これを学内外の読者の皆様は今一度、胸に刻んでいただき、法学部と法政大学、生物学界へのご貢

献に対して、法学部教授会一同が心からの感謝の意を込めて先生の追悼号とし、慎んで月井先生のご冥福をお祈りいたします。

月井雄二先生のご逝去を悼む（和田）